

VIA AIR MAIL  
PAR AVION

https://www.jaljalahealth.org/

石田龍吉医師の  
LETTER from Nepal

ネパール便り

17 通目

シラさんの国会医師資格合格を祝って記念植樹。  
ラリの弟・チリン君が苗木を用意してくれた。



タバン村初めての女医へ  
9年間の道のり



シラさん18歳(当時)

2014年に奨学生として選ばれたときは18歳。それから足掛け9年、通常の6年間に加えて、コロナ禍とネパール医師国家試験制度の金権腐敗による足止めの正面突破に3年、合計9年に及ぶ医師免許獲得への長い道のりでした。この9年間に支援した学費の総額は当初の予定総額300万を大幅に上回り、500万円を超えています。日本の支援者のおかげでこの長期にわたる支援が可能になりました。厚くお礼を申し上げます。



- 1 2016年8月、ネパールから日本への帰路、シラさんが留学している中国湖南省・長沙医学院を訪問。
- 2 2019年2月5年生の旧正月休みに帰省、タバン村で私の外来を手伝いながら実習。
- 3 2019年6月医学部卒業後7月よりインターン・臨床実習を開始したが、2020年2月、コロナ禍のため強制帰国。
- 4 ネパール医師会の差別待遇への抗議行動。

コロナ禍による途中帰国の中国留学ネパール人医学生に対するネパール医師会の差別待遇への抗議行動の結果、不足している臨床実習の単位をカトマンズで取得することが認められ、やっとネパール医師免許への道が開かれました。しかし最後の難関が医師国家試験。金持ち特権階級にやさしく、田舎の貧乏人には厳しい、ゆがんだ医師国家試験制度は王国時代の名残ですが、内戦を経て制定された平等主義憲法のもと、国民の声により変化しつつあり、そのおかげで今回私たちも“へき地平等医療”を掲げて正面突破に成功しました。

6月17日、ラリの墓標にシラ医師の合格記念植樹をしました。女性医療従事者ラリはタバン村最初の内戦犠牲者、ポリオワクチン接種中に武装警官に拉致・殺害されました。ラリが命を懸けた夢“へき地平等医療”を今後シラ医師とともに実現してゆくことを約束しました。今76歳の私は、20年後の彼女の活躍を見届けることはできませんが、この木は大きく育ち彼女を見守ってくれるでしょう。



特定医療法人 健和会 広報誌

地域はわが家

2023.夏 Vol.31

- 徳本理事長ごあいさつ
- 「うえだ文庫」「かわもと下田部シープハウス」特集
- ネパール便り 17通目



今秋うえだ下田部病院は開設35周年を迎えます。  
老健ふれあいは25周年、かわもとこどもクリニックは7周年です。

11月23日(祭日)に記念式を行います。基調講演を三好春樹さん(生活とリハビリ研究所代表)にお願いしました。演題は「生き方としての介護」です。

理学療法士である三好さんは人生をかけて介護と取り組んでこられました。そして到達した三好さんの「介護論」をじっくりと聞きましょう。

三好さんの「介護」は「医療」や「リハビリ」と置き換えることもできます。介護を受ける人と介護を行う人の関係=深い深い人間論です。

現在地球上に存在している人類は私たちホモサピエンス(人間)だけです。これは遺伝子解析などによって証明されています。10万年前地球上には8種類くらいの人類がいました。人類は地球の歴史の中で、氷河期や飢餓、隕石の衝突などの様々な危機に会い、アフリカで生まれたホモサピエンスだけが生き残りました。そしてアフリカから地球上へと広がっていったのです。

どうしてホモサピエンスは危機を乗り越えて生き残ることができたのでしょうか。諸説ありますが、もっとも有力なのが「助け合うことができる」「協力して危機を乗り越える」です。飢餓の時、食料を強いものが独り占めにするのではなく「みんなで分けて食べる」です。そして「協力することができる」です。人類はみんな兄弟・姉妹なのです。

今地球上ではウクライナでの戦争や環境破壊・温暖化など、地球の破壊と人類の破滅の危機が迫っています。ホモサピエンスの原点に戻って乗り越えて行きたいものです。

三好さんの論のもう一つの特徴は、生活がリハビリだ、ということです。生活=リハビリです。入院ベッドで食事をするのではなく、食堂まで行って食べる、その過程を介助・介護する。リハビリは、障がいを持った人が生活するために行います。その生活がまたリハビリになる。この関係をつかむと相乗的に進むでしょう。

私たちが日々実践している医療・リハビリ・介護がもう一つ深い人間の本質として認識できるのでしょうか。

特定医療法人 健和会 理事長 徳本 光昭



【予告】基調講演「生き方としての介護」  
2023年11月23日(祭日) 三好春樹(生活とリハビリ研究所代表)



「うえだ文庫」は半年の準備期間を経て、5月14日のプレオープンイベントを迎え、6月7日から本格的な活動を開始しました。

当初は「何人くらいの子どもたちがやって来てくれるかな」と多少の不安もありましたが、回数を重ねるごとに徐々に増え始め、今ではリピーターを中心に10名を超える子どもたちの居場所になってきています。

またボランティアの募集には、守る会のみなさんをはじめ「うえだ文庫」のチラシを見た方が新たにボランティアに加わっていただいています。

みなさんには、子どもたちの見守りをはじめ、一緒にゲームや工作をしたり、紙芝居や読み聞かせなど、これまでの経験を活かした活動をお願いしています。

子どもたちの文庫での過ごし方は千差万別です。本を読む、宿題をする、紙コップやゲームで遊ぶ、ビーズでプレスレットやオリジナルシールを作ったりと多岐にわたっています。広いフロアなので、体育で習っている側転の練習をすることももったり、開館中は子どもたちの笑い声が絶えません。ただ、紙芝居や本の読み聞かせの時間は、その世界に入り込んでいるように熱心に耳を傾けています。

文庫は夏休み中も休まず、時間も午後1時～5時までと通常よりも2時間長く開きました。8月23日には、文庫の夏祭りを開催しました。子どもたちはピンゴゲームやクレーンゲーム、スーパーボールすくい、輪投げ、魚釣りに歓声を上げ、楽しいひと時を過ごしていました。

学校が新学期を迎えるなか、今日も元気に子どもたちが文庫にやって来ています。家や学校に次ぐ、子どもたちの第三の居場所として「うえだ文庫」も地域の中に根付きつつあることを感じます。



### 2022年11月からスタートした、現代版寺子屋「かわもと下田部シープハウス」。開所から約1年が経過した今の状況をお伝えします！

「かわもと下田部シープハウス」開設から早や1年が経ちました。毎週月曜日18時になると、子どもたちは「めぶきホール(かわもとこどもクリニック2F)」に集まってきます。開設当初は数人だった子どもたちも、今では実人数50名、毎回の参加は30名を超える高槻市内屈指のシープハウスとなりました。この地域(桜台・下田部団地)における、子どもの居場所ニーズは理解していたつもりですが、想像を遥かに超える子どもたちの参加に驚かされました。

参加している子どもたちは、桜台小学校・竹ノ内小学校・西大冠小学校・若松小学校と同一校区内に限りません。「友達と塾感覚で参加する子」「家で遅くまで留守番をする子」「学校には通えていないけれどシープハウスには来たいと思う子」など、子どもたちが抱えるニーズは多様です。子どもたちは大学生ボランティアとの交流を中心に、学校(校区)や学年(年齢)を超えた交流の中で学び、遊びます。皆本当に嬉しそうな表情で、楽しそうに過ごしています。

今年6月には「子ども食堂イベント」も行いました。市内複数飲食店が、共同ボランティアとして「キッチンカー」で訪れてくれ、子どもたちにはカレーとかき氷が振舞われました。子どもたちは初めて見る本格的なキッチンカーに興味津々。カレーを食べては「おいしい!」と、たくさんの子がおかわりした結果、カレーとかき氷はあっという間になくなりました。

そんな中、ある低学年の女の子が楽しそうに「いろんな人と皆と一緒に食べると特別おいしいね!」とってくれました。それは何気ない一言と情景でしたが、家庭でも学校でもない「第3の居場所」と言われる光景がそこにはありました。

NPO法人ファミカ代表の吉田きんじさんが話されている「私は子どもたちにとことん寄り添いたい どんな環境に生まれてもあきらめないでほしい スタートラインは皆おなじ いろんなことに挑戦してほしい そんな君たちに伝えたいことがある 知ってほしいことがある 出会ってほしい人がいる 小さなキッカケで人生は必ず変わる そんなキッカケがここにある」との思いと、私たち法人の「わんらぶ」や「うえだ文庫」をはじめとした地域活動が結びつくことで、新たな地域のコミュニティを育み始めていることを実感しています。

かつて公害反対運動を通してうえだ下田部診療所が開設され、さらに地域の皆さんと手を携えることでうえだ下田部病院建設へと進展していった歴史を振り返ると、地域の活性化は法人の活性化にも繋がっています。今後も健和会として医療・福祉を基盤に、全世代を対象としたさまざまな地域づくりに全力で取り組んでいきたいと思ひます。

## うえだ文庫

開館時間 毎週水曜日/午後3時～5時

場所 かわもとこどもクリニック2階  
めぶきホール

